「吠え方を忘れた犬」

アマリリス　（20 代）

まりは、六年前の十月、保護犬として家に来た。ちょうど世の中が、コロナという見えない不安に包まれ始めた頃だった。

小さな細い体をしていて、背骨は少し曲がっていた。栄養が足りなかったのか、目はどこか灰色がかって見えた。

そして、吠えられなかった。正確には、声が出せなかった。
最初は大人しい犬なのだと思っていた。でも違った。まりは、吠え方を忘れていたのだ。
ごはんの時に近づくと低くうなる。けれど、大きな声は出さない。おもちゃを渡しても、どう遊べばいいのかわからない様子で、ただこちらを警戒しながら見ていた。
犬らしい無邪気さが、まりにはなかった。

おしっこシートだけをかじり、時には食べてしまうこともあった。何度取り替えても繰り返した。

ボールの音にも異常なほど反応し、「ぽん」と聞こえるだけで、半狂乱のようにクンクン泣き始めることもあった。
その小さな背中を見るたびに、胸の奥がきゅっとなった。どんな場所で、どんな時間を生きてきたのだろう。この子に何があったのだろう、と。

私は毎日、まりに話しかけた。
「生まれてきてくれてありがとう」「だいすきだよ」
そして、何度も伝えた。
「引っ越す時も、どんな時も、必ず一緒に連れていくよ」

まりはずっと、私たちをうかがっていたのだと思う。何をしても怒らないか。失敗しても見捨てないか。本当に、ここにいていいのか。

私たちは、無理に距離を縮めようとはしなかった。ただごはんを置き、名前を呼び、同じ部屋で過ごした。怒鳴らない。叩かない。見捨てない。それを、毎日少しずつ伝えるしかなかった。いつか信頼関係ができると信じてやり続けた。

おなかを見せて眠るようになるまで、一年かかった。

その日、ケージの中でひっくり返るように眠るまりを見つけた時、私は息をのんだ。まりは、やっと安心できる場所を見つけたのだ。その小さなおなかを見ながら、心の底からうれしくて涙がこぼれた。

コロナの不安が家の中にも漂っていたあの頃、私は仕事を失い、家にいる時間が増えた。自然と、まりと過ごす時間も長くなった。先の見えない毎日の中で、私たち家族もどこか張り詰めていた。それでも、まりが少しずつ眠れるようになっていく姿は、「安心する」ということを、静かに教えてくれていた。

まりは今では、よく吠える。宅配便が来ても、家族が帰ってきても、嬉しくても、不満でも、一生懸命に吠える。

最初は、声を持たない犬だった。けれど今のまりは、自分の感情をまっすぐに出す。

血は繋がっていない。でも、この子は間違いなく家族だ。まりはずっと「ここにいていいのか」を確かめていて、私たちもまた「ずっと一緒にいるよ」と伝え続けながら、少しずつ本当の家族になっていった。

「わんっ」その声を聞くたびに、私は思う。

ああ、まりは今、ちゃんとここにいて、生きているのだと。